新制
人
114

学位審査報告書

（ふりがな） 氏　　名	シュ　ギンカ 朱　銀花
学位（専攻分野）	博士（人間・環境学）
学位記番号	人博　第　465　号
学位授与の日付	平成21年3月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 共生文明学専攻

（学位論文題目）

日・中・韓三国の言語における動物文化の比較考察
　－「馬」、「牛」、「犬」、「猫」にまつわることわざを中心に－

論文調査委員	主査　教授　　阿辻　哲次 副査　教授　　赤松　紀彦 副査　准教授　　道坂　昭廣 副査　准教授　　小倉　紀蔵

人間・環境学研究科

氏　名	朱　銀花

（論文内容の要旨）

本学位申請論文は、日本・中国・韓国（現在の韓国と北朝鮮を含めた朝鮮半島全体を申請者は韓国と呼ぶ）で使われてきたことわざに登場する動物を考察の対象とし、それらの動物がそれぞれの地域と時代に人間の生活とどのようにかかわってきたか、その文化史的様相をことわざの分析から究明しようとするものである。

論文全体は６章にわかれ、それぞれの章がさらにいくつかの節にわかれている。

第１章では本論文がもつ研究意義について述べる。日中韓の三カ国は同じ漢字文化圏に属し、歴史や文化などの面において相互に関連が深く、またかつては中国を中心として長期にわたる人的物的交流をおこなってきた。したがって三カ国の言語や習慣などをめぐる比較研究は、これまでに東アジア地域の文化を総体的にとらえるための重要な領域として、歴史学や言語学、社会学などさまざまな観点から数多くなされてきた。本論文はその比較研究の一環として、地域ごとの動物とのかかわり方をことわざという言語表現から分析するものであり、三カ国の比較文化研究ではまだおこなわれていない方法によって、新しいアプローチを目指すものである、と主張する。

第２章では、三カ国で既刊の辞典・事典などを資料として、ことわざに見える各種の動物に関わる用例を数多く抽出し、それらを哺乳類、鳥類、魚介類、虫類、爬虫・両生類、その他（龍や鳳凰など）の６種に分類して整理と統計を加え、動物がことわざに登場する出現頻度、あるいはことわざとして使われるときにこめられる寓意性などについて比較しつつ分析と考察をおこなう。出現頻度が非常に高い「十二支」の動物は、もともと中国で生まれたものが日本と韓国に伝わったものであり、時刻や方位などを表すときは共通の意味に使われるのに対して、種々の事柄の象徴や信仰の対象としてことわざにも頻繁に登場し、そのときには各国の文化や歴史的背景による影響を受けて、意味に相当大きな相違があることが事例とともに示される。

第３章では、三カ国のことわざの中で動物があたえられている役割についての比較研究がおこなわれる。そこでは第２章に掲げる統計に基づいて、馬・牛・犬・猫の４種が考察の対象に選ばれ、これらの動物が家畜として飼育されてきた歴史を、文献資料の記述によって概観する。そしてそこから看取される人間にとっての実用性と、社会生活面での風習や信仰に由来する特質がこ

氏　名	朱　銀花

とわざにどのように反映されているかを比較しつつ考察する。この章においても三カ国間の比較研究が展開されるが、それとともに家畜がことわざに溶けこんでいくプロセスを、同一国家での時間軸にそってあきらかにしようと試みる。

第４章では、日中韓三カ国のことわざで、馬・牛・犬・猫がことわざに現れるときのイメージや、それが象徴する事物について比較した結果が論じられる。ことわざは国家や民族など特定の集団で長い年月をかけて形成された表現として伝承されるものであるから、そこに民族特有の感情や心理が濃く反映されていることはいうまでもない。また動物を使った慣用表現には、地域ごとに観察された動物の生態的特徴や習性、あるいは人々の行動様式などが比喩的に使われていて、そこにそれぞれの国の動物観や民族性の投影を読み取ることができ、それを通じてそれぞれの国の間の社会・文化的相違点をより深く理解することが可能である。

第５章では、現在の三カ国でそれぞれの動物に対してどのような意識と認識が存在するかに関しての調査の結果が検討されている。具体的には各国の現在の大学生（岡山大学・吉林大学・釜山大学）を対象としておこなったアンケートの結果を分析し、若い世代が動物に対してどのような感覚をもっているか、また過去のことわざをどう認識し、どのように使用しているかという点についての比較と考察がおこなわれる。調査の結果では、全体的に言えばいずこにおいても日常生活におけることわざの使用率があまり高くないが、三カ国の中では中国でことわざの使用程度が一番高く、次に韓国、日本の順になる。またことわざに見える動物をめぐっても、馬・牛・犬・猫の役割やイメージに関して、共通するものもあれば、相違するものもある。

第６章に示される結論では、馬・牛・犬・猫を中心に動物文化史の視点からことわざを考察したことに意義があると述べる。また日本、中国、韓国のことわざを同時に取りあげることにより、同じ漢字文化圏に属する三カ国間の動物をめぐる交流の歴史や文化などのあらましが見えたという。

氏　名	朱　銀花

（論文審査の結果の要旨）

本学位申請論文は、日中韓三カ国で使われてきたことわざに登場する各種の動物を考察の対象とし、それらがこれまでの人間の生活とそれぞれの地域でどのようにかかわってきたか、その特質と地域間の相違について、ことわざを分析することを通じて究明しようと企図するものである。

いずれの地域においても、ことわざには過去の人々が社会生活を営む中で得られた知恵や技術が盛りこまれ、またそこには自然や環境的要素に起因する生活上の困難を克服するための工夫などが凝縮されている。したがってそれはまた、異なった地域間での文化的事象に関する比較研究をおこなう際にも、きわめて重要な資料となることは言をまたない。

本論文が研究対象とする日中韓の三カ国は、西暦紀元前の時代から現代にいたるまで、二千年以上にもわたる相互交流の歴史を有し、かつて東アジアに存在した漢字文化圏を構成するもっとも重要な地域であった。だがそれにもかかわらず、三カ国の内部を詳細に検討すれば、そこには気候風土などの自然条件、および宗教的要因などによる相違点の存在を指摘できる。

このように隣接する文化圏における諸事象に関する比較研究は、これまでにも数多くの研究があり、本論文が対象とすることわざに対する比較研究についても、これまで特に韓国語をベースとした論文が数多く公刊されてはいる。しかしことわざを動物に関する面だけに限定して詳細に分析し、その比較考証をおこなったものはほとんど例がない。この点が、本研究における最大のオリジナリティといえる。

本論文中に引用されることわざの数量はきわめて多数にのぼる。日中韓それぞれ異なった言語資料を自由に渉猟して、かくも大量の資料を調査し、それを周到に分析した努力は、大いに評価されるべきである。

論文中に取りあげられたことわざが、各国で刊行されている辞典・事典の類に準拠したものにとどまり、原典における検証というプロセスなしにそのまま引用され資料となっていることに関しては問題を指摘できるが、しかしそれぞれの動物がもつ社会との

氏　名	朱　銀花

関係や歴史的な背景に対する分析と着眼点は、きわめてユニークな視点に立つものと評価できる。

またこれまでの東アジアにおける比較研究がともすれば二カ国を対比するものであったのに対して、本論文が三カ国を対象として比較をおこなったものであることも、資料に対する視野の広さの面から評価すべきである。

申請者の研究は、言語学から民俗学や文化人類学の分野にも及ぶ学際的なものであって、これはひとえに、中国語と朝鮮語を母語とし、さらに大学において日本語の高度な会話と読解の能力を身につけた申請者の言語環境に由来するものである。その点で、本研究は申請者にしてはじめて可能なものであったといっても過言ではない。

以上のように、本論文は日常的に使われるがゆえにともすれば看過されがちなことわざに内包される構造的な価値に着目し、従来はほとんどスポットをあてられてこなかった分野に鋭い考察を展開したものである。本論文は東アジア地域の文化と社会の実相を、通時的かつ共時的に捉えようとするものであり、人間の生活と環境にかかわる今後のあらゆる研究活動に対して重要な方向を明示するものと評価できる。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成21年１月30日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。